

聖霊降臨後第24主日(特定27)

2010/11/7

聖ルカによる福音書第20章27節-38節

於:聖パウロ教会

司祭 山口千寿

今年も11月1日の諸聖徒日と2日の諸魂日に、都内の各霊園で墓地礼拝が行われました。わたしは小平霊園と多磨霊園の礼拝の参列しました。小平霊園では200名くらいの方々が出席し、逝去者記念聖餐式が行われました。パウロ教会からも10名くらいの方々が出席しましたが、その中には今年になってからご家族を神さまのもとにお送りし、お別れしてまだ日が浅く、まだ悲しみや寂しさから癒されず、新たに涙される方々もおられたようです。

そのような時に、何が最大の慰めになるのでしょうか。悲しみや寂しさの中から再び立ち上がる力となるのは何でしょうか。それは、お別れした人と再び相まみえることです。それができるならば、悲しみや寂しさは一遍に吹き飛んでしまって、大きな喜びに包まれることになるでしょう。

しかし、地上においては、再び相まみえることがかなわないことは、誰もが頭の中でよく分かっていることです。死による別れというのは、そのような厳しい現実です。では、地上でそれがかなわないのであれば、せめても天国での再会を期待し、その時を待ち望みたいと思うのは、人情ではないでしょうか。

ご葬儀や記念式の時に歌う聖歌の1つに、第518番があります。「きよき岸辺にやがて着きて」という聖歌です。その3節の歌詞は古今聖歌集では、「親は我が子に、友は友に、妹背相会う父のみもと」と歌いました。そして折り返しでは「やがて会いなん 愛(め)でにし者と やがて会いなん」と繰り返し歌うのです。愛する人と、父なる神さまのみもとで、やがて会うことができる、その確信を歌うのです。そのことが信じられたならば、どれほど慰めを得られることでしょうか。

あるプロテスタントの牧師さんが、ご自分の教会の信徒で夫に先立たれた婦人に尋ねられたそうです。天国であの夫と一緒に暮らすことができますよね、と念を押すように質問されたのです。きっとこのご夫婦は仲睦まじいご夫婦だったのでしよう。お互いに愛し合い、信じ合い、支え合って長年連れ添って来たのだから、天国でもこの地上で一緒に暮らしたと同じように、もう一度、愛の関係が回復され、永久の愛に生きたいと願って尋ねたのでしよう。おそらく結婚されている皆さんは、同じ思いを抱いておられることでしょう。

ところがその質問を受けた牧師さんは、「さあ、どうでしょうか」と返事をしたそうです。「間違いなく一緒に生活できますよ」と答えていれば、この婦人は安心をしたことでは。それが牧師が曖昧な返事をしたために、この婦人は信仰がぐらついたということでした。

何故、この牧師さんは、はっきりと答えることをしなかったのでしょうか。それは今日の聖書の中で、イエスさまが次のように語られているからです。「次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあず

かる者として神の子だからである。」そうあります。

この世の生涯を終えて、天国で神さまの復活の力に捕らえられて神の子とされた人たちは、天使と同じような存在なのだ。そして、もう死ぬことがないから結婚生活も天国では必要ないのだ、めとることも嫁ぐこともないのだ」とイエスさまは教えておられます。

つまり、天国での生活というのは、今、わたしたちがこの世で送っている生活と同じことが延々と続いていくのではないと言うのです。復活ということはこの地上の生活が、もう一度同じように蘇ってくるのではないと指摘されているのです。それで、その牧師はイエスさまの教えに忠実に従って、「さあ、どうでしょうか」と答えたのでしよう。

ご主人を先に天国に送って、何時かは自分も神さまのもとでご主人と巡り会うことを期待しても、そのような望みがかなえられることが、即ち復活ということではありませんと、イエスさまは仰るのです。復活の力に結びつけられるということは、今のわたしたちの生活とは、違った在り方をする事なのだと言うのです。わたしたちが、今、結んでいる人と人との関係が、どんなに美しく素晴らしいものであったとしても、それだから、それが拠り所となって、天国の門が開かれるのではありません。復活というのは、人が羨むような仲睦まじい夫婦の間の交わりが、一旦は死によって引き裂かれて消え失せたとしても、それが、もう一度現れるということではないと言うのです。

パウロも、「滅び去るもので蒔かれて、滅びないものに復活する。自然の命の体で蒔かれて、霊的な体に復活する」と教えています(Ⅰコリント 15:42)。天国で、今の生活と同じものが、もう一度起こってくるのではありません。別の在り方になるのです。天国では神さまの力によって変容が起こる、わたしたちが変容にあずかる、それが復活です。天使と同じような者へと変えられるのです。神さまのみ手の中で生きる者とされるのです。神さまにお仕えすることに専心する者へと変えられるのです。

そのことは、もう既にわたしたちに始まっていることです。イエスさまを救い主と信じて洗礼を受けるということは、自分を生かす神さまのいのちを信じることです。わたしたちがこの世のいのちを超えて新たないのちに生き始めることです。神さまのいのちの中へ根を下ろして生きることです。イエスさまに従って、自分の十字架を背負って歩み始めることです。そこにわたしたちの変容が始まっているのです。

それは、今日の聖書の言葉で言うと、「神の子」とされるということです。神さまに繋がるものとされるということです。神さまに義(ただ)しいものと認められて、神さまの命を受け継ぐものとされるのです。神さまの家族とされるのです。これは、わたしたちの力や努力でもって手に入れることが出来るのではありません。夫と妻の愛情の絆が全く確かなものだから、それで得られるわけでもありません。神さまの贈りものとして、お恵みとして、イエスさまの十字架と復活の出来事によって与えられるのです。

今日の福音書の中で、イエスさまはモーセがホレブの山で神さまの召命をうけた時に、神さまは燃える柴の中から「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」とご自身を示されたと述べておられます(出エジプト記3章)。そして更に、

「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」と告げておられます。

モーセに与えられた使命は、エジプトで奴隷となって苦しみの叫び声を上げていたイスラエルを、その状態から脱出させることでした。アブラハム、イサク、ヤコブが信じた神さまは、イスラエルを苦難から解放し、喜びをもって新たな人生を歩む道を開いてくださる神さまとしてモーセに現れ、その働きのためにモーセを召されたのです。

モーセに現れた神さまは、族長たちに臨んで彼らを導いた神と同じ神さまです。イスラエルの先祖たちは、望むべくもないのに神さまの約束を信じて、その実現を喜び楽しむ幸にあずかりました。アブラハムは年老いていて子どもをもうけることを諦めていたのに、そして妻のサラも不妊の女と言われていたにも拘わらず、あなたの子孫は天の星の数になるという神さまの約束を信じて、イサクが与えられたのでした(創世記 15 章、18 章)。

人の思いから言えば不可能と断定せざるを得ない状態の中に、神さまはいつも共にいてくださり、導きを与え、人が希望を置くことが出来るようにしてくださる、神さまという方は、そのような恵を与えてくださる方だと、イエスさまはお語りになるのです。

パウロも、「為(せ)ん方つくれども希望(のぞみ)を失わず」と言っています(コリント4:8)。手立てを全て講じ尽くしても先が開けず、どうして良いか途方に暮れるような中であっても、尚、神さまの力が現れることを確信して希望を持ち続けることができる、信仰を言い表すのです。「死んだ者の神ではなく、生きている者の神」とは、このような神さまです。そのような神さまのふところに生きることが、復活の望みを抱いて日々の生活を送ることです。

初めの問いに戻りますが、天国では親しい人と再び会うことはないのでしょうか。そんなことはありません。復活の力によって生かされて、神さまの家族の一員として会うことが赦されるでしょう。神さまと一緒に賛美する群れの一人として、まみえることになるでしょう。そのことを期待して良いのです。そこに希望をつなぐことを、イエスさまはきっと認めてくださるに違いありません。「神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言われたイエスさまです(マルコ 3:35)。わたしたちが、この地上で神さまの御心に生きるときに、天国でもまた神さまの絆に結ばれた同士として、「親は我が子に、友は友に、妹背相会う」幸いにあずかることができる。その確信と喜びのもとに、主にある交わりを大切にしながら、信仰に根ざした日々の生活を送って参りたいと思います。